図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国語専門学校
東京都渋谷区代々木3-22-1　TEL.03-3299-2395　FAX.03-3299-2604

No.176
文化学園図書館
2023年4月5日発行

文化学園大学のリベラルアーツ

社会人基礎力や人間力を高めるために教養は欠かせません。今号では、総合教養を担当する4名の先生に執筆をお願いしました。どんな授業をしているのか？　何が身につくのか？　知ってもらえる機会になれば幸いです。
おすすめの書籍も紹介してもらいましたのであわせてご覧ください。

身近なものから世界とのつながりを学ぼう

栗山 丈弘　文化学園大学 准教授

グローバル化（globalization）の進展が叫ばれて久しい。グローバル化とは、一般に「ヒト・モノ・カネ・情報などが国境を越えて地球規模で流動していく現象」と説明される。

言うまでもなくこのグローバル化は、私たちの生活に様々な良い変化をもたらしている。航空網の発達は、早く気軽に海外に旅行に出かけることを可能にしたし、ネット通販によって海外で生産された服飾雑貨が、瞬く間に手元に届くようになった。世界は小さく、そしてシームレスになりつつある。

しかし一方で、グローバル化は、良い変化だけでなく、人権、平和、貧困、環境など地球的な課題や多文化共生などの地域的な課題といった負の変化ももたらしている。

教養科目「国際理解論」を担当して15年ほどになるが、一貫して「グローバル化の負の側面」に焦点を当てて、学生たちとともにその問題を考えてきた。

2015年に国連で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）は、グローバル化の負の側面を克服するための人類共通の目標として、広く認識が広がった。近年は、国際理解論の授業でもSDGsの目標をトピックスとして取り上げている。小、中、高校でも授業で取り上げられることも多く、「SDGsは大切なこと」「SDGsに関連する取り組みは良いこと」といった認識をもっている学生が大半であり、授業でSDGsを取り上げると学生たちの関心も高い。

しかしながら「SDGsに関連する取り組みは良いこと」といった一面的な認識は、実は危険である。とりあえずSDGsと掲げておけば善である――という「SDGsラベル貼り」が社会に横行しているのも事実だからだ。教養とは、話題性のあるものを鵜呑みにするのでなく、自分の頭で考え判断する力を備えることだと思う。そのためには、SDGsという概念からではなく、グローバルな社会に生きる私自身の身近な生活から出発することが大切だろう。

そのうえで2冊の本を紹介したい。1冊はとても古い本だが、大津和子『社会科＝一本のバナナから』である。バナナを通じて日本とフィリピンのつながりを学んだ高校の授業記録である。著者の大津は、国際理解教育の基礎・基本を教えてもらった私の恩師であり、学生時代に衝撃をうけた一冊である。もう1冊は、José.川島良彰他『コーヒーで読み解くSDGs』である。コーヒーを切り口に、環境や開発、持続可能な社会づくりについて学ぶことのできる一冊となっている。

2冊ともに、私たちの身近なものが世界とつながっていることを教えてくれる。だからこそ、私たちの行動を変えることが、社会を変える力を持つことに気づかせてくれるのである。

大津和子著『社会科＝一本のバナナから』(『授業づくりハンドブック』)国土社(1987)〈375.314/O〉

José.川島良彰、池本幸生、山下加夏著『コーヒーで読み解くSDGs』(『ポプラ新書』235)ポプラ社(2023)〈617.3/K〉

栗山 丈弘

文化学園大学 国際文化学部 准教授
北海道教育大学大学院教育学研究科社会科教育専修修了。文化女子大学室蘭短期大学助手、専任講師、文化女子大学(現:文化学園大学)専任助教を経て、2013年より現職。

【研究内容】
国際理解教育における教材･カリキュラムの開発および実践研究。観光まちづくりによる地域活性化の実践研究。

【論文】
「異文化理解のための民族衣装の教材化―教材『世界の民族衣装』の開発と実践―」『ファッションビジネス学会論文誌』(共著)18号(2013)
「国際理解教育における『グローバル社会』の教材開発方略に関する一考察」『文化女子大学紀要 人文･社会科学研究』19号(2011)

〈　〉内は、当館の請求記号です。

読書の楽しみのために―「私」を世界に誘う文学講義の十年史

勝山 祐子　文化学園大学 教授

私の専門はフランス20世紀の作家マルセル・プルーストである。だが本学に着任し、人間と世界の関係を広く学ぶための枠組みである「総合教養」の一端を担うことになったとき、この巨大な作家を扱うことにためらいを覚えた。プルーストは美術や建築、モードといった視点からアプローチすることの可能な作家だ。学生の興味を引くだろう。だが、読書の楽しみを知るための授業としたい。一研究者によってミクロに解析されたプルーストが適切な教材とは思われない。本音をいえば、まっさらな頭で文学を楽しむ場がほしい。

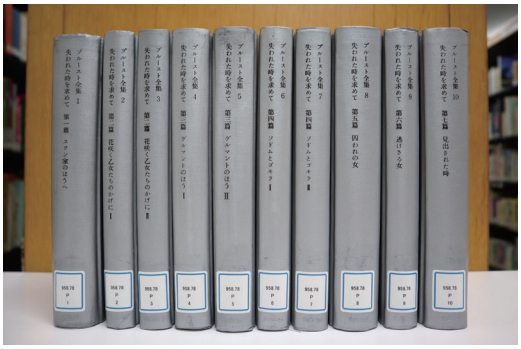
当時の本学はまだ女子大学だった。だが、男女共学化は決まっていた。そこで、女子大学としての最後の学生のために、プルーストと同時代の女性作家コレットの小説『青い麦』を選んだ。これは、少年にとっては甘酸っぱいのかもしれないが少女にとっては過酷すぎる物語で、#MeToo時代にこそ読むに値する小説である。

続いて教材としたのがプルーストやコレットの友人ジャン・コクトーだ。愛読者を自認する学生のいたことが理由だった。コクトーは『美女と野獣』で知られる映画監督でもあるが、異なる分野で優れた作品を残した詩人である。LGBTへの理解も欠かせない。コクトーが手がけたバレエや映画における美術や衣装、手作り感満載な特撮技術も新鮮に違いない。

そうこうするうちに、日本は不倫に対する中傷が跋扈する社会となった。ところで不倫こそ、近代小説が飽くことなく追求した主題なのだ。日本と西洋の狭間で苦悩した夏目漱石も不倫小説を書いた。文学というプリズムを通して不倫を眺めると、「社会制度VS個人の幸福」という近代人の直面する葛藤が浮かび上がる。そこで授業のテーマを近代西洋の不倫小説とし、ゲーテからシャーロット・ブロンテを経て、フローベールやトルストイ、漱石に至る、学生時代に一読すべき小説群と格闘することになった。

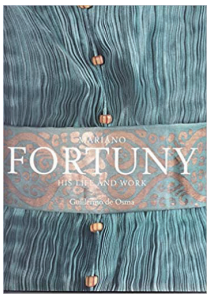
だが、世界はコロナに覆い尽くされた。世界を脅かす集団的不条理を前にしては個人の幸福も色褪せる。こうしてアルベール・カミュの『ペスト』が教材となった。思い返せばその昔、カミュの『シーシュポスの神話』が私をフランス文学に導いた。コロナ禍によって初心に返り、学生と共にカミュを読み、「私」のちっぽけな存在に再び対峙することとなったのである。学生の、「研究」というフィルターを通さない素直な考察を通して、私もまた新たなカミュに出会い、新たな世界を発見している。学生に感謝を伝えたい。

最後に個人史的推薦図書を3つ。プルーストとの出会いとなった井上究一郎個人完訳『失われた時を求めて』。ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』。これを読まずして人間とロシアを語ることなかれ。最後はGuillermo de Osmaの『Mariano Fortuny : His Life and Work』。プルーストも言及するマリアノ・フォルチュニィの服飾は、モードが芸術にもなりうることを証明している。



プルースト著　井上究一郎訳『失われた時を求めて』(『プルースト全集』1～10)筑摩書房(1984～1989)〈958.78/P/1～10〉

ドストエフスキー　亀山郁夫:訳『カラマーゾフの兄弟』／光文社古典新訳文庫(2006～2007)〈文庫//D/1～5〉



Guillermo de Osma『Mariano Fortuny His Life and Work』Rev. ed, V&A Publishing(2015)〈593.028/F〉

勝山 祐子
文化学園大学 総合教養 教授
慶應義塾大学大学院修士課程修了後、渡仏。リュミエール=リヨン第2大学にてDEA課程及び博士課程修了。准教授を経て2018年より現職。

【研究内容】
フランス近現代文学
ブルジョワ社会が成熟を遂げた第三共和国の文化的･社会的コンテクストの中でマルセル･プルーストの小説を読み解くこと

【論文】
「Proust historien — le temps historique dans la Recherche」(博士号取得論文)
「プルースト、バクスト、フォルチュニイ―レオン･バクストによるバレエ･リュスの衣装と舞台装置のデザインを巡って―」『日本情報ディレクトリ学会誌』Vol.15(2017)

教養としての心理学:心理は真理につながる?

杉田 秀二郎　文化学園大学 教授

「心理学」とは、心（こころ）の理（ことわり）、すなわち心の法則を見つける学問です。そして、その法則を日常生活に生かすことが目的です。人は誉められるとうれしくなり、叱られると落ち込みますが、それはなぜでしょうか。また、人はみな合理的に判断し、行動するのでしょうか。さらに、世の中にはモチベーションや承認欲求など心理学から来ている言葉が多くあります。これらに対して、心のしくみを知った上で心の共通する部分と個人差を明らかにし、自分と他人を知ることによって人間関係や日常生活に役立てることができます。

本学の総合教養の「心理学」では、3つの柱があると私は考えています。

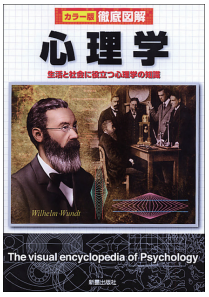
1. 学生の関心に応える：性格、心理テスト、感情、人間関係など学生が関心を持つテーマについて、専門的・学問的な見地から解説します。1）

2. 青年期に健康的な生活を送るために：心理学に関するものとして、ストレスや悩みにどう対応していくかという「心の健康」はとても重要です。また、身体面でも学生生活では生活が不規則になったり一人暮らしを始めたりと、生活習慣が重要課題になります。そこで、悩みや心理的問題への対応（臨床心理学）、自我同一性や自己実現（発達心理学）、ストレスへの対応や禁煙、依存問題（健康心理学）、そして社会生活における人間関係やコミュニケーション方法、カルトや消費生活への対応（社会心理学）について学びます。また対人援助の実践例として、学内の学生どうしでサポートするピアヘルパーについても取り上げます。ポジティブ心理学という、物事を肯定的にとらえる視点も大切です。2）3）

3. 専門との関わりへの導入：学生のみなさんはファッションはもちろん、造形・建築、文化・観光といった専門を学んでいますが、ほぼすべてに心理学が関わっています。上級学年で服装心理や環境心理などを学ぶこともありますが、科目として設置されていないとしても自分の専門を心理学的に見たらどうなるかという観点を持つことができたら、より視野が広くなるかもしれません。またそれは、心理学の様々な応用例を知ることにもつながります。専門分野の心理学の書籍例は、次の通りです。

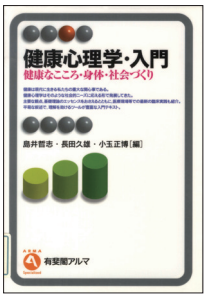
・『被服と化粧の社会心理学』大坊郁夫、神山進編（北大路書房）
・『はじめての造形心理学』荒川歩編（新曜社）
・『観光の社会心理学』小口孝司編（北大路書房）

総合教養（Liberal Arts and Sciences）とは、ただの一般的知識という意味ではなく、またすぐに役立つ実用的知識でもないかもしれませんが、物事を多角的・相対的に考える視座を提供し、普遍的な真理に近づくためのものです。人間の心理は単純ではなく複雑で奥深いですが、それもまた真理です。学生の専門が何であれ、広い意味で人の喜びや幸せ、ウェルビーイングに役立つために学んでいるのではないかと思います。それを意識し、目の前に人間を思い浮かべてその人がどう感じ、どう考えるかという人の心理を想像し、心理を基準にして考えてもらえたらと思います。



1）青木紀久代、神宮英夫編著『心理学 生活と社会に役立つ心理学の知識』（『カラー版徹底図解』）新星出版社（2008）〈140/S〉

2）大野久編著『エピソードでつかむ青年心理学』（『シリーズ生涯発達心理学』④）ミネルヴァ書房（2010）〈371.47/E〉



3）島井哲志、長田久雄、小玉正博編『健康心理学・入門　健康なこころ・身体・社会づくり』（『有斐閣アルマ』Specialized）有斐閣（2009）〈490.14/K〉

杉田 秀二郎
文化学園大学 総合教養 教授
早稲田大学大学院人間科学研究科健康科学専攻修士課程修了、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。2015年より現職。
認定専門健康心理士。

【研究内容】
健康に影響する心理的な要因としての健康観、主観的健康、生活の質などについての検討や調査。
ファッション心理学全般およびファッションが心身の健康に与える影響

【著書】
島井哲志ほか編『健康心理学・入門』（分担執筆）有斐閣（2009）
健康社会学研究会編著『事例分析でわかるヘルスプロモーションの「5つの活動」』（編著）ライフ出版社（2016）

【論文】
「女子大学生の健康観と被服行動との関連についての探索的研究」『繊維製品消費科学』52巻2号（2011）
「大学生のファッションショーにおける心理的要因の研究（第1報）―ショーの前後における自己効力感・集団効力感の比較―」『繊維製品消費科学』55巻12号（2014）

運動やスポーツがもたらすもの

森谷 直樹　文化学園大学 准教授

学生時代よりスポーツを競技として取り組んでいた私は、僥倖に恵まれスポーツを教えること、究めることを生業としています。

本学の教養教育において教えることとして「スポーツ演習」「健康・スポーツ論」を担当しています。人々の歴史・生活の中で培われてきた創造的な文化活動であるスポーツを本学の教育活動にどのように組み込み、志向しているかを説明します。「スポーツ演習」では、受講生が上手くなることを通じてスポーツの醍醐味を味わうことを追求しています。同時に多様な運動経験を持つ異質合同の受講生たちが教え合いや学び合いを経験しながら、やがてそこが普段の教室や演習室とはひと味違う「居場所」となるよう働きかけています。

一方の「健康・スポーツ論」では、文化としてのスポーツが社会において果たしている役割や機能、直面している課題を広く捉えることで、自らの健康維持・増進に向けてスポーツとどのように向き合っていくべきかをテーマとして、受講生と一緒に考えています。

こうしたスポーツを教えることと表裏一体の関係にあるスポーツを究めることとして、トライアスロンという持久系複合競技におけるアスリートのパフォーマンスやレース展開、それらの関係性を明らかにすることを主なテーマとしています。選手やレースそのものの現場を大切にしたい私はフィールドに出向き、そこで観察すること、洞察することで多くの気づきを貰っています。こうした活動による気づきや発見は、目の前の現象を掘り下げて捉えるという点で、教育活動にも通じるものが多くあります。

こうしたスポーツ観を抱く私から、スポーツを少し外側から眺めた2冊を紹介させていただきます。

1冊目はエリック・クリネンバーグ著の『集まる場所が必要だ』。1995年にシカゴを襲った熱波を契機に社会的に孤立する人々に着目した著者は、インフラとしての「集まる場所」の役割を社会学的視点から解き明かしています。コミュニティやそれをとりまく社会や公共のあり方を再考させられる良著です。私としては、スポーツもそこで一定の役割を果たし得ると強く感じるところです。

もう1冊はアンデシュ・ハンセン著の『運動脳』。運動の効果を述べた本は数多くありますが、世界的ベストセラー『スマホ脳』の著者らしく、運動が脳に与える影響を多方面から科学的に説いています。めまぐるしく変化し続ける現代社会に生き、不健康に陥るリスクと絶えず隣り合わせに過ごしている我々だからこそ、著者の言う「脳は動くためにできている」を心に留め、実践していくべきなのかもしれません。

学ぶことにおいても大きな変化をもたらすとされるSociety 5.0などで示される来るべき社会において、自ら問いを立て、解決法を見つけ出し、新しい価値を創造していく能力が求められます。そうした能力を高めるために「教養」が大きな武器となるでしょう。どうか学生の皆さんには、幅広い知的好奇心と共に歩んでいってもらいたいと願っています。

エリック・クリネンバーグ著　藤原朝子訳『集まる場所が必要だ 孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版（2021）〈361.7/K〉

アンデシュ・ハンセン著　御船由美子訳『運動脳』サンマーク出版（2022）〈491.371/H〉

森谷 直樹

文化学園大学 総合教養 准教授
北海道大学大学院教育学研究科博士課程単位取得 満期退学。2001年文化女子大学室蘭短期大学助手、2002年同講師、2009年文化女子大学（現：文化学園大学）助教を経て、2013年より現職。

【研究内容】
トライアスロン選手およびパラトライアスロン選手のパフォーマンスやレース展開の分析と評価に基づき、我が国の国際的競技力向上に向けた方策づくりと実践をテーマとしている。公益社団法人日本トライアスロン連合情報戦略・医科学委員長として理論と実践の両面からアプローチしている。

【著書】
井筒紫乃監修・編著『保育内容「健康」幼稚園教諭・保育士をめざす』（共著）圭文社（2010）
河田隆編著『幼児体育教本』（共著）同文書院（2007）

【論文】
「トライアスロン・ディスタンスにおけるランパートの展開が総合記録に与える影響」『文化学園大学紀要』第47号（2016）
「青年女子における運動能力と身体活動量の関係」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』第48号（2017）

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください
TEL:03-3299-2395　[URL]https://lib.bunka.ac.jp
twitterとfacebookにて図書館の情報を発信しています
[twitter]https://twitter.com/bunkalib　[facebook]https://www.facebook.com/lib.bunka

100th BUNKA GAKUEN
文化学園は、2023年に創立100周年を迎えます。
記念ロゴマークは、本学園の学生がデザインしました。